



「明るく」あいさつができる
 「仲よく」そうじができる、
 「正しく」上級生が手本を示す

平成29年11月 日
 北九州市立藤松小学校
 校長 瀧上正彦

平成29年度 全国学力・学習状況調査の結果の報告と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語、算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 教科に関する調査結果の概要

教科・区分	学力調査の分析(傾向や特徴)
国語A	「話す・聞く能力」を問う問題の正答率が高く、話し合いの様子を聞き取り、適切な説明となっているものを選択するなど、聞き取りによる情報整理ができている。手紙の構成についての知識など、「言語に関する知識や理解」に課題が見られ、今後改善に力を入れる必要がある。
国語B	記述式の問題でも無回答が少なく、正答率も高くなっている。物語の叙述を適切に読み取り、それらをもとにして自分の考えをまとめる問題の正答率が、全国平均を20%近く上回っていた。考えて書く力がつき、時間内にすべての課題に取り組むことができている。
算数A	無回答問題がなく、どの問題に対しても意欲的に取り組むことができている。計算など技能を問う問題について極めて高い正答率であった。1より小さい数をかけたときの積の大小についての理解を問う問題の正答率が低く、図などを用いて考える課題に力を入れる必要がある。
算数B	国語B同様、記述式の問題での無回答率、正答率に優れ、思考力・判断力・表現力の成長が見られる。問題文から解決に必要な数値を選択し、順序立てて考えるなど「数学的な考え方」を問う問題の正答率が高かった。平均を求める際の、「飛び離れた数値の扱い」を問う問題の正答率が低いなど、知識や理解の定着を図る指導をていねいに行う必要がある。

2. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・起床時間が昨年度(5年生時)の調査より安定し、規則正しい生活が送られていると考えられる。「生活がんばりカード」の活用により、家庭と連携して生活習慣の見直しを行った成果が出たと考えられる。 ・自分にはよいところがある、将来の夢がある、と考える児童の割合が、昨年度調査より増加し、自己肯定感の高まりがみられる。 ・全国平均と比較し、平日、土日祝日を問わず、テレビゲームに使う時間が長く、家庭学習や学習塾等での学習に充てる時間が少ない傾向にある。家庭学習の習慣化を図る取組を行う必要がある。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- ・基礎的な知識・理解の定着を図る補充学習(時間割に設定済み)やこまめな診断テスト(各教科での練習問題やミニテスト)などを継続して行う。
- ・すきま時間の読書の推進。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・「生活がんばりカード」に継続して取組み、家庭と連携して子どもを育てる風土づくりを行う。
- ・「生活がんばりカード」での家庭学習の取組を啓発する。
- ・「うち読」を勧め、読書カードや家庭チャレンジハンドブックの活用を強化する。

